



Title	鑑賞プログラム研究：日本童謡誕生100年
Author(s)	宮下, 茂
Citation	長崎大学教育学部紀要, 5, pp.39-45; 2019
Issue Date	2019-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10069/39118
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-16T19:17:58Z

鑑賞プログラム研究：日本童謡誕生100年

宮 下 茂

(長崎大学教育学部音楽教育 (声楽))

Program of listening to music : Japanese children's song birth for 100 years

Shigeru MIYASHITA

はじめに

2018年の今年は明治維新から150年、そして、童謡誕生から100年を数える。

童謡の名称に関して「日本童謡辞典 (上笙一郎編)」には、以下のように説明されている。「総称的なニュアンスでもちられる場合には、〈子どものうたう歌の全般〉を意味しており、近代以前よりの〈わらべ唄〉はもちろん、明治期に学校教育の場を主軸として興った〈唱歌〉、その唱歌を乗り越えようとの意図で大正期に登場した〈童謡〉、および第二次世界大戦後に現実の子どもとの距離を縮めようとの考えから新称された〈子どもの歌〉のすべてを含む。しかし一般的には、唱歌を克服して大正期に大きく花開いた童心賛美主義的な子どもの詩歌である〈童謡〉を指し、とりわけ音楽家によって作曲され〈歌曲〉となったものを意味している。」¹⁾

ここでいう童謡誕生100年の童謡とは、一般的な、狭義の名称である童謡を指している。

明治維新後に、ドレミによる外国の音楽が日本に入り、唱歌が誕生して50年ほどで生まれた童謡であるが、長田はそれを「新鮮で、やさしくて、芸術的に豊かで、そのうえ大正ロマンチズムに彩られた童謡」²⁾と述べている。

今回提案する鑑賞プログラムでは、詩歌としての童謡の歴史を知るだけでなく、当時の作曲者の意図を楽譜から読み解き、聴取するものである。それにより、ドレミによる音楽が日本に入って50年たらずの時代に創作された、当時の若き日本人作曲家の作り出した趣を感じ、同時に生活や社会の中で豊かに音楽と関わることを目的とする。

1. 唱歌誕生の歴史

1-1 《明治維新後》

慶応4年(1868年)の明治維新の後、近代的な国家を目指す日本では広く国民に近代教育を学ばせることとなり、我が国最初の近代的な学校制度を導入した。

明治5年(1872年)に学制を發布。それまでの「寺子屋」「藩校」を廃止した。「体育」「唱歌(音楽)」等それまで学問と見なされていなかった科目については「当分これを欠く」状態とし、教育方法を学ぶ留学生を海外に派遣した。

1) 上笙一郎編「日本童謡辞典」：東京堂出版、2005年

2) 長田暁二「付録日本童謡発達小史」：日本童謡名曲集：364、全音楽譜出版社、2006年

明治12年(1879年)に「音楽取調掛」を設置。アメリカの音楽教育家ルーサー＝ホワイチング＝メイソンが来日。明治15年(1882年)に最初の音楽教科書である「小学唱歌集」初編が発行された。その頃、海外の楽曲に日本語の歌詞を載せた「輸入唱歌」が誕生した。

明治44年(1911年)になって、歌詞も旋律もすべて日本人による唱歌集「尋常小学唱歌」(全6冊)が発行された。(一部のみ「尋常小学読本唱歌」として明治43年(1910年)に先行発表)尋常小学唱歌の中には、「かたつむり」(♪でんでん虫 かたつむり)「鳩」(♪ぼっ ぼっぼっ 鳩ぼっぼ)「朧月夜」「故郷」「冬景色」など、今日も知られる唱歌が含まれる。

当時の唱歌の歌詞について、海沼は以下のように述べている。

「歌詞は学校教育における教材として相応しいもの、例えば日本人の倫理観、基本的思想、日本の美しい風景を愛でる心、日本人の誇りや愛国心を育てることに主眼を置く。」³⁾

上述の政府主導の唱歌集のほかにも、「故郷の空」を含む「明治唱歌」(1888～1890年に6冊)、滝廉太郎の「お正月」を含む「幼稚園唱歌」(1901年)などが民間から発行され、東京音楽学校(1887年に音楽取調掛から改称。現、東京芸術大学音楽学部)でも、ヘンリー・ビショップの「埴生の宿」を含む「中等唱歌集」(1889年)、滝廉太郎の「箱根八里」「荒城の月」を含む「中学唱歌」(1901年)などが編纂された。

これら、滝廉太郎を筆頭とする留学を経た優れた作曲家を輩出する時代になっても、文語調で教条的な歌詞は改められなかった。

1-2 《明治時代の後期から大正期》

慶応から明治への時代を経て、国定教科書の中でも「言文一致唱歌」が興隆し始めた。また、民間の検定教科書から「もっと音楽的に傑出した唱歌を作ろう」との動きがでてきた。

明治45年(1912年)から大正元年(1912年)にかけて「幼児唱歌」(1～2集)が発行され、大正2年(1913年)から4年(1915年)にかけて「新作唱歌」(3～10集)、大正4年(1915年)から7年(1918年)にかけて「大正幼年唱歌」(全12集)が発行され、大正8年(1919年)から昭和2年(1927年)にかけて「大正少年唱歌」(全12集)が発行された。

そのような中、国内の作曲家と文学者の協力により、名作唱歌が誕生した。

1-3 《昭和初期》

この時代になると、唱歌も少しずつ親しみやすい作風へと変化していった。

昭和16年(1941年)3月1日に、国民学校令を公布。小学校が「尋常小学校」から「国民学校」へあらためられた。そして教科書が改訂された。唱歌は「ウタノホン」へ表題が改まり、より親しみやすい唱歌となった。

3) 海沼実「海沼実の唱歌・童謡読み聞かせ」：10、東京新聞、2017年

2. 童謡誕生の歴史

2-1 《大正期》

童謡誕生に影響を与えたものとして「大正デモクラシー」（1910年代から1920年代にかけて（概ね大正年間）に起こった、政治・社会・文化の各方面における民本主義の発展、自由主義的な運動、風潮、思潮の総称）の波に乗った新しい文学運動が挙げられる。その文学運動の影響を受け、それまでの「花鳥風月」、「教訓」、「歴史的叙事」などを《美文調の歌詞》でつづり、子どもの心情から離れた「文部省唱歌」への反発から《赤い鳥童謡運動》（童謡創作運動）が起きた。

大正7年（1918年）、児童文学者の鈴木三重吉が、児童向け雑誌「赤い鳥」を刊行。文学界で主流となり始めた「言文一致運動」の影響もあり、原則として「口語体」で書かれ、子ども達の日常のエピソードを描いた作品も生まれた。長田はそれを、「新鮮で、やさしくて、芸術的に豊かで、そのうえ大正ロマンチズムに彩られた童謡を、子女たちは喜んで向かい入れたのです。」と述べている。また、「欧米文化が洪水のように流れ込み、急速に文明国家に成長した日本が、その過程の中で生み出した特殊な児童文化が『童謡』で、他の国ではあまり類をみかけません。“童謡”という言葉はもともと、子守や遊びの時などに子どもたちによって自然に作られて歌われ、民間に伝承されてきた“わらべうた（口承童謡）”の意でした。今では、それが子どもが作った歌や詩、子どものために作られた歌謡や詩など、子どもの歌の全般の総称になりました。」と述べている。⁴⁾

学校教育下における唱歌教育に対して批判的な立場を強める「赤い鳥童謡運動」であったが、読者からの便りの中に「私はお気に入りの童謡があると、自分で節をつけて歌ったりしています」があり、それが「歌える童謡」へのアイデアへと繋がったという。そして、雑誌に掲載される「童謡」への作曲を依頼することとなった。山田耕筰へ作曲を依頼するものの当時多忙であったため、成田為三、近衛秀麿等の若手が推薦された。

大正8年（1919年）に「赤い鳥曲譜集」を刊行。そこで日本初の曲譜付き童謡とされる「かなりや」（西條八十の作品に成田為三が作曲）が誕生することとなった。そして、それに続いて多くの童謡が発表されていった。これら大正時代に創作された童謡の多くは、当時の児童向け雑誌によって発表された。

2-2 《昭和の戦前／戦中期》

大正時代に次々と発表されてきた童謡であるが、昭和に入り受難の時期となる。それまでの学校教育も戦時下教育へと切り替わり。抒情的な童謡の多くは「感傷的で有害」といわれ、軍国歌謡や少国民歌の類の歌に代えられた。

2-3 《戦後の復興》

戦後の混乱と苦しみの中、ラジオから聞こえる歌声が人々の心を《明るく照らした》といわれる。その一端に、受難の後に復活した童謡もあった。

以上のように、大正7年（1918年）以降に子ども達の視点で描かれ創作された数々の童

4) 長田暁二「付録日本童謡発達小史」：日本童謡名曲集：364、全音楽譜出版社、2006年

謡の詩に触発され、多くの作曲家が生み出した「歌える童謡」の数々が創作された。それらの楽譜からは、単なる創作活動に止まらず、当時の作曲家の音楽への探求心が感じられる。それは、ロマン派歌曲をも彷彿させる音楽であり、日本の童謡の魅力でもある。

3. 鑑賞（演奏）プログラム「日本童謡の世界～童謡100年によせて～」

1. かなりや	(西條八十詞／成田為三曲) [1919年「赤い鳥曲譜集（詩のみ1918年「赤い鳥）」発表]
2. 雨	(北原白秋詞／弘田龍太郎曲) [1919年「赤い鳥曲譜集（詩のみ1918年「赤い鳥）」発表]
3. 浜千鳥	(鹿島鳴秋詞／弘田龍太郎曲) [1920年「少女号」発表]
4. ちんちん千鳥	(北原白秋詞／近衛秀麿曲) [1921年発表]
5. 砂山	(北原白秋詞／中山晋平曲) [1922年「小学女生」発表]
6. 里の秋	(斎藤信夫詞／海沼實曲) [1945年 JOAK ラジオ「外地引揚同胞の午後」発表]
7. 待ちぼうけ	(北原白秋詞／山田耕筰曲) [1924年発表]
8. あわて床屋	(北原白秋詞／山田耕筰曲) [1928年「赤い鳥（詩のみ1919年）」発表]
9. からたちの花	(北原白秋詞／山田耕筰曲) [1925年「赤い鳥（詩のみ1924年）」発表]

4. 演奏解釈等

4-1 かなりや

1918年に西條八十の詩のみ「赤い鳥」に発表され、1919年に成田為三が作曲、「赤い鳥曲譜集」に発表された。

現在では、レガートでなめらかな曲調に編曲された演奏を耳にすることもあるが、楽譜を見ると拍子とリズムの変化が特徴的であり、成田の楽曲への意欲的な取り組みが分かる。一般の音楽教科書で教えられるようなレガートでのリズムよりも、《あっけらかん》としたハバネラ風のリズムが感じられ、それにより、《歩むような》二拍子と《優雅な》三拍子の組み合わせによる拍子の変化を、より捉えられる曲になる。(譜例1、譜例2)

ドイツ歌曲を参考にすると、ルテールはドイツ歌曲の特徴のひとつとして二拍子と三拍子の結合を挙げ、

(譜例1) 1小節～



(譜例2) 16小節～



《2対3》は音楽語法にある豊かさを与え、ブラームスが好んで使っているという。⁵⁾ レガートな演奏による2拍子のリズムでは、その曲想から子どもの深層心理の恐ろしさを感じるごととなり、歌詞の内容もより深刻に思え、かなりやをいじめてはいけないという《教訓としての歌》にも聞こえてしまう。それでは、この詩に込められた子どもの発想の《無邪気さ》や《悪気のなさ》が感じられない。また、その後の3拍子の部分では、より滑らかな印象となり、大人の饒舌な詭弁を感じてしまう。この曲の3拍子への変化は、ゆったりとしながらも、スラーがどこか不安げな様子を生み出し、そこから、波の上で歌を思い出すかなりやの様子が想像でき、考えつつも、その様子を子どもへと説く、大人の言葉が優しく伝わると考える。(譜例2) また、このスラーのかけ方から、ブラームスの「航海」作品96-4などに見られる《不安気な》表現も思い出される。(譜例3)

(譜例3) ブラームス「航海」作品96-4



(譜例4) 1小節～



4-2 雨

1918年に北原白秋の詩のみ「赤い鳥」に発表され、1919年に弘田龍太郎が作曲、「赤い鳥曲譜集」に発表された。シンプルな印象の楽曲で、1節から5節まで、同じ旋律を繰り返す有節形式。

楽譜を見ると、淡々としながらも、歌とピアノのリズムの組み合わせが止まることなく、時間の経過を感じさせる特徴のある音楽と分かる。特にピアノパートの1拍目の動きと歌の2拍目の動きが交互に現れ、止まることのない時間を感じさせる。しかし、ピアノパートの2拍目に書かれているテヌートが、軽快に進まない歌のリズムとの均衡を保っている。(譜例4)

永遠に雨が降り続けるかと思わせる5節の繰り返しの後、後奏でその均衡が乱れる。ピアノパートのみリズムが乱れ、雲に切れ間が生じる様子を思わせる。そして、最後に《陽の光が指すような》明るい和音が響くのが印象的である。

4-3 浜千鳥

1920年に鹿島鳴秋作詞、弘田龍太郎作曲の童謡として「少女号」に発表された。

海沼によれば、「千鳥は空に円を描くように飛びまわることが多く、こうした様子を見た昔の人々が千鳥のことを『幼くして命を落とした子どもが、鳥に姿を変えて天から降りてきた』と言い伝えた」という。また、昔の医療技術では、生まれたばかりで亡くなってしまいう新生児が少なくなく、幼くして亡くなる子どももいたという。⁶⁾

鹿島鳴秋も病気によって幼い子どもを失くしたという。また、鹿島自身は6歳で両親と生き別れ、祖父に育てられたため、親を思う気持ちが強かったという。子を思う親の気持

5) エヴァン・ルテール「フランス歌曲とドイツ歌曲」：24, 白水社, 1963年

6) 海沼実「読んで歌って楽しめる正しい唱歌・童謡のススメ」：147, ノースランド出版, 2007年

ちと親を思う子の気持ち、その双方の思いが込められた童謡といえる。

4分の3拍子の曲中、4小節目のプレスを挿んで8小節目単位の長いフレーズが歌われることから、おおらかでありながら、ゆったりとした3拍子ではないことが分かる。その1小節の中に8分の6拍子を思わせるピアノ

パートが書かれ、繊細な波の様子が描かれていることが分かる。旋律の持つおおらかな動きとピアノパートの繊細な動きとの組み合わせが、作詞者の親と子の双方の気持ちを表していると感じられる。(譜例5)

(譜例5) 3小節～



4-4 ちんちん千鳥

1920年発行の「赤い鳥」童謡第5集には、北原白秋作詞、成田為三作曲の四分の四拍子の有節形式による「ちんちん千鳥」が発表されている。しかし、1921年に同じ歌詞に近衛秀麿が作曲した「ちんちん千鳥」の方が評判であったという。近衛は通作形式により、有節形式よりもより繊細な表現を求める、意欲的な作品として作曲している。

4-5 砂山

新潟の寄居浜を訪れた北原白秋が、新潟の海岸風景を表したのが歌詞の砂山である。その詞に、新潟地方の民謡「樽きぬた」(新潟甚句)の弾むようなリズムで中山晋平が曲付けし、1922年「小学女生」に発表され、広く児童から愛唱された曲。言葉の素朴さと日本海の力強さとが絶妙に相まっている。

4-6 里の秋

斎藤信夫作詞、海沼實作曲によるこの曲は、今日において日本の秋の歌を代表するような抒情歌であるが、3節目の歌詞には特別な郷愁や哀愁が感じられる。

この曲が作られた終戦後、南国に出兵していた帰還兵を出迎える歌として1945年にJOAKラジオ「外地引揚同胞の午後」で発表された。当初、一度限りの放送予定だったのが、戦災家族を励ますために繰り返しラジオから放送させられたという。

4-7 「待ちぼうけ」と「あわて床屋」

「日本の童唄の伝統に根ざした新童唄」の創作を目指し、雑誌「赤い鳥」の中心的存在であった北原白秋は、多くの童謡を発表している。創刊当初は、外遊に出る山田耕筈に代わり、成田為三、草川信などの若手作曲家が作曲を手掛けていたが、山田の帰国後、北原白秋と山田耕筈の二人で多くの名作を創作した。

「待ちぼうけ」は、中国の寓話を北原白秋が童謡に書き換え、山田耕筈が作曲し1924年に発表された。

「あわて床屋」は、大正8年(1919年)に発表された詩に石川養拙が別の曲を作っていたものの評判を得ず、昭和3年(1928年)に山田が作曲した作品が今日も歌われている。

それぞれの歌詞に物語があるが、物語中、特に大きな事件の起こらない「待ちぼうけ」

と、大きな事件の起こる「あわて床屋」。各詞ともに5節からなる詩の形式で物語が進行し、山田は有節形式により、同じ旋律を繰り返す歌とした。物語の変化を伝えるための表現が、演奏者に委ねられた曲といえる。

4-8 からたちの花

1924年に北原白秋の詩のみ「赤い鳥」に発表され、1928年に山田耕筰の作曲で歌として発表された。

この詩は、子どもらしさを感じさせる、話し言葉の終助詞「～よ」を脚韻として整えられている。繰り返されるその「～よ」の感情を、山田は通作形式により作曲し、その表現によって、童謡をより芸術的な歌へと昇華させている。演奏者にとって、感情表現の難しい曲ともいえる。

終わりに

以上が童謡生誕100年を知るための鑑賞（演奏）プログラムの動機、プログラム内容、演奏解釈等である。

今回提案する鑑賞プログラムでは、詩歌としての童謡の歴史を知るだけでなく、当時の作曲者の意図を楽譜から読み解き、聴取するものとした。それにより、ドレミによる音楽が日本に入って50年たらずの時代に創作された、当時の若き日本人作曲家の作り出した趣を感じる可以考虑。

尚、今回のプログラムを平成30年11月2日に実演を行う予定である（平成30年10月31日現在）。⁷⁾

参考文献等

上笙一郎編「日本童謡辞典」：東京堂出版、2005年

長田暁二 「日本童謡名曲集／付録日本童謡発達小史」：全音楽譜出版社、2006年

海沼実 「読んで歌って楽しめる正しい唱歌・童謡のススメ」：ノースランド出版、2007年

海沼実 「海沼実の唱歌・童謡読み聞かせ」：東京新聞、2017年

井手口彰典「童謡の百年 なぜ「心のふるさと」になったのか」筑摩選書5017：筑摩書房、2018年

7) 「宮下茂 バリトン・リサイタル2018～美しきかな日本語の歌～童謡誕生100年よせて。」(文部科学省 教育・文化週間参加), 平成30年11月2日(金) 18:30, 長崎創楽堂(長崎大学文教キャンパス内), 宮下茂(バリトン・教育学部教授), 三上次郎(ピアノ・教育学部教授), 曲目: 日本童謡の世界「かなりや」他, 日本語で歌うドイツの歌曲「菩提樹」他

